

平成22年度第1回看護学部研究会

日 時：平成22年6月23日（水）12：00～12：40

場 所：300講義室

心臓突然死の原因となる心筋疾患の分子遺伝学的研究

看護学部（専門基礎）准教授 荻部 明彦

若年者の心臓突然死の原因としては肥大型心筋症をはじめとする心筋疾患が多い。これらの心筋疾患はしばしば家族性に発症し、遺伝的異常が推定されてきた。1980年代後半以降、分子遺伝学の進歩により、病理学的な仮説を設定することなく、遺伝学的に疾患の原因遺伝子・分子を同定することが可能となり、心筋疾患においても応用されている。

疾患遺伝子座の同定は、世代間の遺伝子の組み換え現象と特定の領域に存在し識別が可能なDNA配列をマーカーとして利用し、疾患形質と遺伝子領域の連鎖を統計学的に検討して行われる。また遺伝子の変異は通常、野生型のDNA配列との違いを発見し、変異の影響を評価し決定される。

今回はこれまでに所属した米・日の研究グループで行った研究である、不整脈原性右室心筋症の二つの新規疾患遺伝子座の同定、肥大型心筋症の新規遺伝子変異同定と変異蛋白の解析、拡張型心筋症と肥大型心筋症の疾患遺伝子の共通性の事例、WPW症候群の新規疾患遺伝子座の同定、房室伝導障害を先行合併する非定型心筋症の遺伝子解析、遺伝子解析の臨床応用である遺伝子診断へ向けた取り組みを報告する。

このような分子遺伝学的研究の発展により、心筋疾患の概念が変わりつつある。また遅発性遺伝性疾患において、遺伝子診断はこれまでは不可能であった予防的治療の可能性を切り開くと同時に、家族間で遺伝情報をどのように取り扱うかという課題が生じることも紹介する。

平成22年度第2回看護学部研究会

日 時：平成22年7月21日（水）12：00～12：40

場 所：301講義室

看護学と教育学の間で－教育史の視点から

看護学部（教職科目）准教授 山岸 利次

学校教育における「ケアリング」（N・ノディングズ）の模索や、教職の専門職像としての「反省的实践家」論（D・ショーン）の提唱等、「第三者」的に見れば－もっとも報告者は教育学研究者であり、「第三者」的視点などとりようがないのだが－昨今の教育学の動向は、看護学の知見から多くのことを吸収している、さらに言えば、看護学の研究動向の後追いをしているかのような状況にあるといえる。

こうした状況は、一方において、従来の教育学があまりに近視眼的に学校教育にのみ注意を払ってきたことによる学の狭隘さに由来するわけだが、その一方で、そもそも看護学と教育学が同根であり、そのような学の根本的なあり方を近年の（教育）史学研究が明らかにしてきたという、教育学の学的性格に関わる原理的な反省が教育学研究者による看護学への「越境」の試みを促したということも強調されるべきことである。例えば、「看護師」と訳される“nurse”が、もともとは「乳母」と訳されるような意味を持っていたという事実は、歴史的世界においては看護と教育が同じ意味世界を共有していたことを端的に示すものである。

以上のような観点から、本報告は、教育史研究の成果を踏まえ、看護と教育が原理的にどのような関係にあるのかということ、特に“education”の語源的考察を中心に検討しようとするものである。なお、報告の構成は以下の通りである。

- I <産>・<育>としての教育－educationの語源
- II educationの学校化－乳を与える「父」
- III 歴史的視点と現代教育

平成22年度第3回看護学部研究会

日 時：平成22年9月15日（水）12：00～12：40

場 所：301講義室

深部静脈血栓症予防用具における褥瘡予防の検討

看護学部（成人看護） 助教 井口 巴

褥瘡の発生は、患者に苦痛を与えるとともに、褥瘡の局所管理・治療に時間を要し、医療費の負担の問題にもなる。そこで、いかに褥瘡予防をすることが臨床現場において重要となる。

近年、低侵襲手術方法の進歩により、手術適応患者の拡大に伴い、高齢な患者も手術を受ける機会が増加していることが考えられ、深部静脈血栓症発症（以下Deep Venous Thrombosis :DVT）リスクや褥瘡発生リスクの高い患者の増加が推測される。そのような患者に間欠的空気圧迫装置や弾性ストッキングを使用した場合に褥瘡をおこす可能性があると考えられる。

肺血栓塞栓症／深部静脈血栓症（静脈血栓）予防ガイドライン2004が提唱されて以降、DVT予防用具が普及するとともに、間欠的空気圧迫装置や弾性ストッキングの使用により、褥瘡や皮膚障害が発生したとの症例がいくつか報告されている。さらに、弾性ストッキングと間欠的空気圧迫装置の併用による褥瘡や皮膚障害の発生症例報告もある。弾性ストッキングと間欠的空気圧迫装置を併用することが、DVT予防に効果的か否かについては明確にされておらず、かつ併用することが褥瘡発生とどのような関係性があるかについても十分に検討されているとは言い難い。また、褥瘡の好発部位として、仙骨部、足・足関節部、大転子部、腸骨稜部などの骨突起部であることは、広く周知されてはいるが、骨突起部以外に褥瘡が生じうるということやDVT予防用具により褥瘡が発生するという認識は低いと考えられる。

そこで今回、臨床でのDVT予防用具の併用状況とDVT予防用具装着部位の褥瘡発生状況、褥瘡発生要因、DVT予防用具装着部位の褥瘡発生リスクについての看護師の認識について実態調査を行い、DVT予防用具装着部位の褥瘡発生予防のための看護の課題を検討したので報告する。